# 冬の登山

岩波写真文庫　166

冬の登山
166

# 岩波写真文庫 166　冬の登山

編集　岩波書店編集部
監修　松方三郎　林和夫
写真　中央大学山岳部　岩波映画製作所

写真提供：浅石靖　飯塚弘一　内田耕作　遠藤利寛　大沢肇　太田鑿傘木德十　風見武秀　川上晃良　梶本德次郎　後藤三郎　小林敏　中俣正義　西納久之　橋本三八　橋本誠二　原田藤三郎　船越好文　東薬大・北大・早大各山岳部

## はじめに

大自然を少しでも生活の役に立つものとするために多くの努力を重ね、出来得れば温和な恵みの自然であれかしと願うのが人間の本来の姿であろう。それにもかかわらず一部の人々が幾多の困難を冒して地球のさいはての極地を訪れたり、荒涼とした氷と雪と岩の山々を訪れ、そこに大きな喜びを見出すのは何故であろうか。

妖しいまでに美しい冬の山のたたずまいがその人々の心を引きつけるのであろうか。一人一人では如何にも弱い人間が、自らを鍛練し登山用具や隊の運行法に多くの工夫と改良をこらして困難と闘い目的を達する喜びも大きい。又山で生活する間に養われる友情も魅力となる。これ等色々なものが重なって冬の山に引きつけるのでもあろうか。

ともあれ足早に秋が去り、人々が心重く冬の憂鬱を迎えるとき、山を愛する者の胸はひそやかな山恋い心にうずくのである。冷い木枯しがホトホトとガラス戸をたたく音をききながら山道具の手入れをしているうちに、心はいつしか雪の山小舎に天幕に、そして風の荒れ狂う氷雪の尾根にと遊んでいる。

目　次



定価100円　1955年10月25日　第1刷発行　1959年4月20日　第4刷発行  発行者 岩波雄二郎　印刷者 米屋勇　印刷所 東京都港区芝浦2ノ1 半七写真印刷工業株式会社　製本所 永井製本所
発行所　東京都千代田区神田一ツ橋2ノ3　株式会社岩波書店

冬近く——白毛門頭より谷川岳一の倉沢

苗場山神楽峰(2029)より北西を望む

左手前苗場本峰(2145)　遠く北アルプス連峰(左)と頸城連山(右)　(　)内の数字は標高m

伯耆大山(1731)北面

鈴鹿，鎌ヶ岳中腹より御在所岳(1210)

南アルプス農鳥岳（3026）と富士山

八ヶ岳横岳より赤岳（2899）

笠ヶ岳より穂高連峰

剣岳（池の平山より）

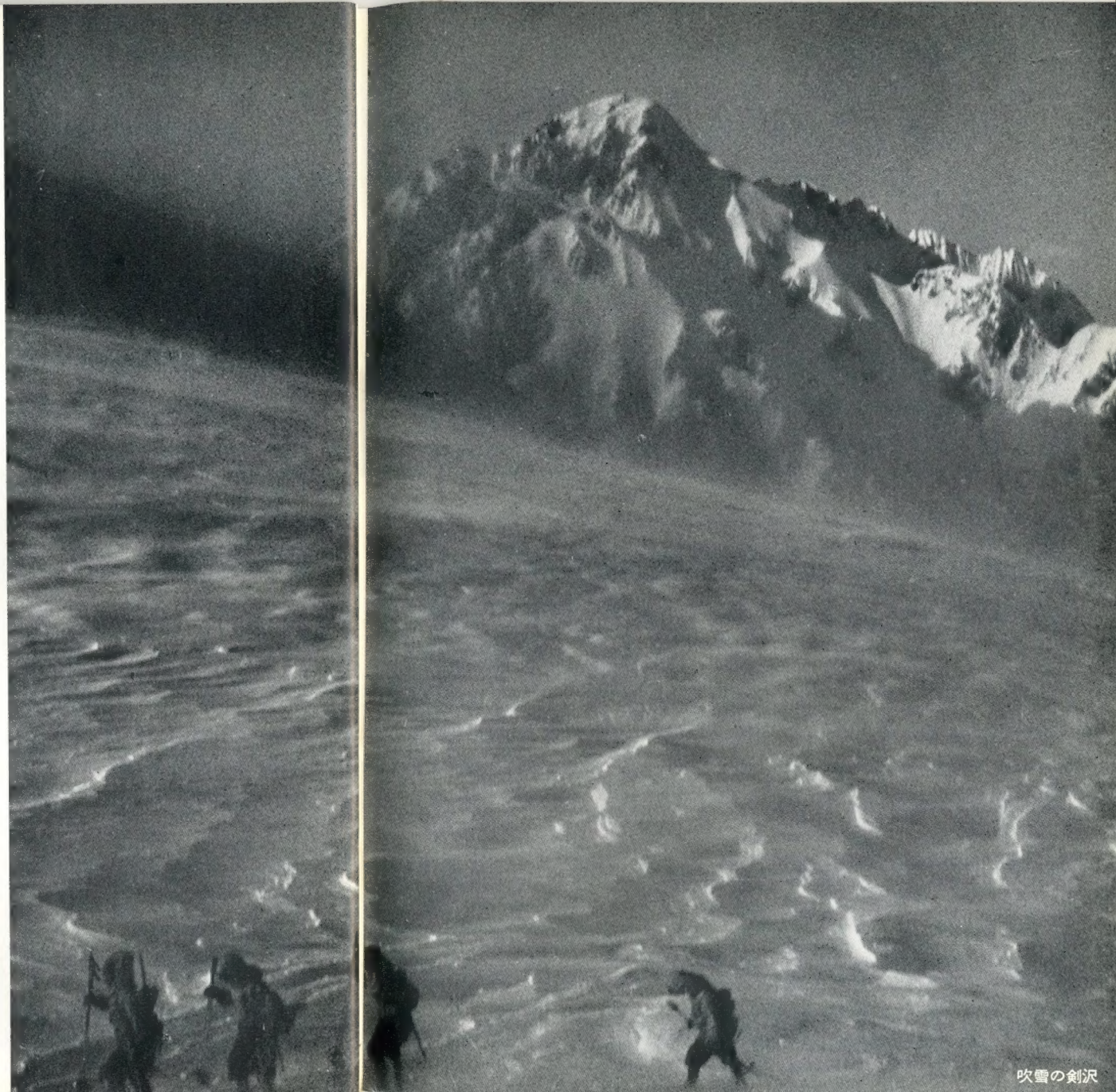
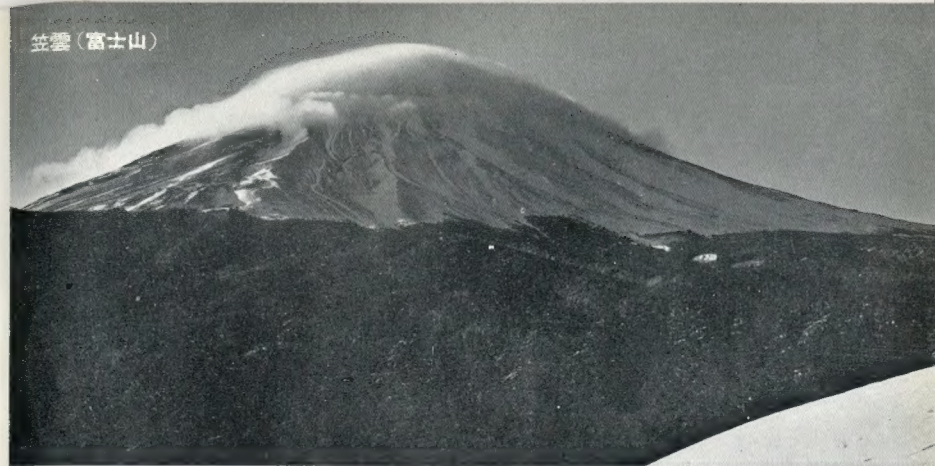
中央アルプス木曽駒ヶ岳(2956)

## 冬山の自然現象

東海道の白い砂青い松の背景となるうららかな富士山や、真夏に白衣の人々がえんえんと連り六根清浄をとなえて登る富士山は、大きさはあってもおだやかな風物であるといえよう。しかし真冬にその山腹をのぼりつめ頂上附近にあるときは様相を一変する。まず風が強い。凍った斜面を滑落せぬ様しっかりふんまえて、一歩一歩登りながらも絶えず時間を気にし、帰りのことを慮って置かねばならない。頂上の向う側から赤味を帯びた金色の恐竜の様な形をした雲が湧き上る様に出て来る。典型的風知らす雲である。見る見るうちに山の腹を横に這って風の渦がこちらへやって来る。ピッケルで急いで足場を作るとすぐ低い身がまえをする。やがてごうっと音がするとまるで身体を斜面からひっぺがそうとでもする様に襲いかかる。辛うじてそれをやり過し隊の態勢を整える暇もないうちに次の強風が襲いかかる。こんなときの恐しさは一通りのものではない。

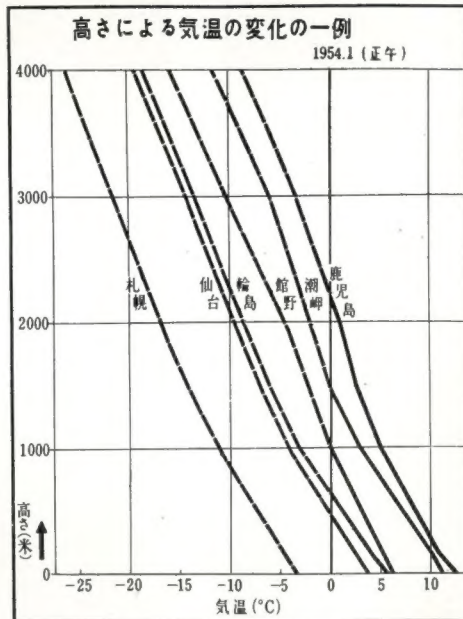
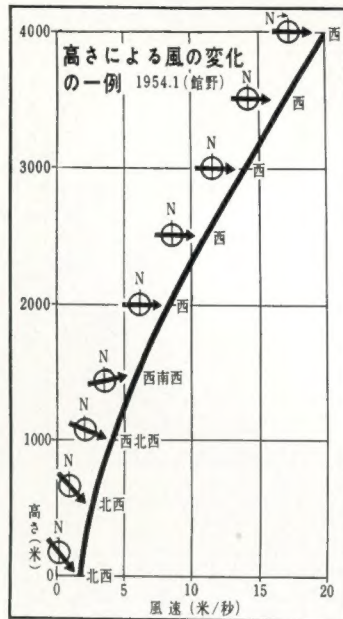
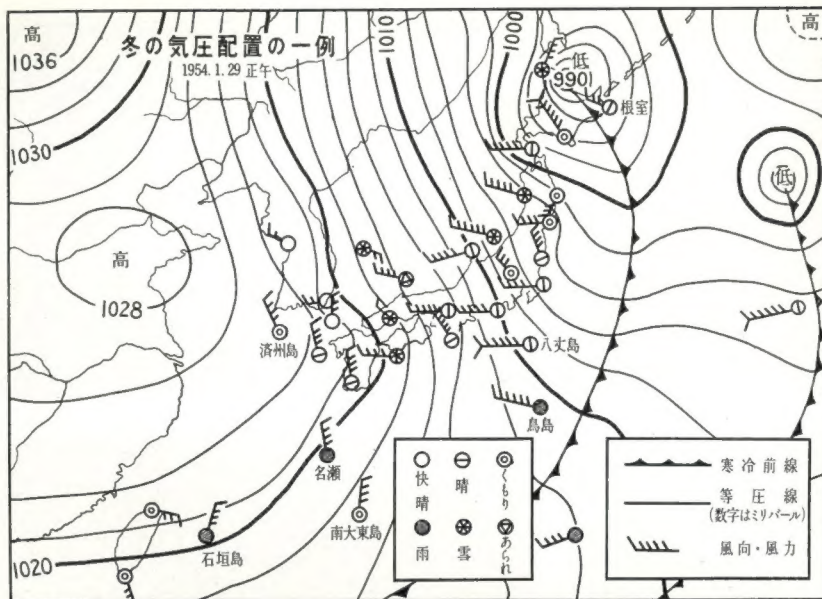
そうかと思うと稀には湿った雪がどんどんつもることもある。そしてわれわれの常識をはるかに超えた大雪崩となる。又或る時は登りには深い雪の中を膝迄もぐって頂上を極めたのが、下りには雪はきれいに消しとんで青氷の斜面となっていることもある。零下三〇度の寒さを体験することもある。富士山一つを例にとっても冬の自然はきびしい。

雪と寒さは冬の山登りを難しいものとし、興味深いものとしている。そして同時に危険の原因ともなっている。登山者は平素から冬の自然現象について正確な知識を積み、これを恐れると同時に、その中に親しみを見出し、冬の山で生活出来る方法を見出してゆかねばならない。

吹雪の剣沢

笠雲（富士山）

## 冬の気象

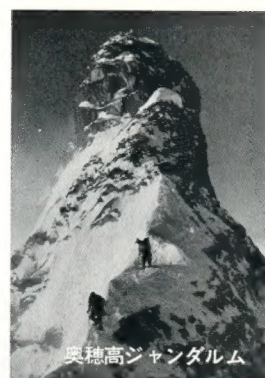
日本の冬は，大陸からの季節風の影響をうけ，山も寒気の強風に洗われる．高く上ると偏西風になっていることが多く，条件によっては突風も起す．季節風が吹きつのっている間は天気も単調だが，その止み間は複雑な変化をする．笠雲など山にかかって動かないように見える雲は，そこに強い風が吹いていることを示す．

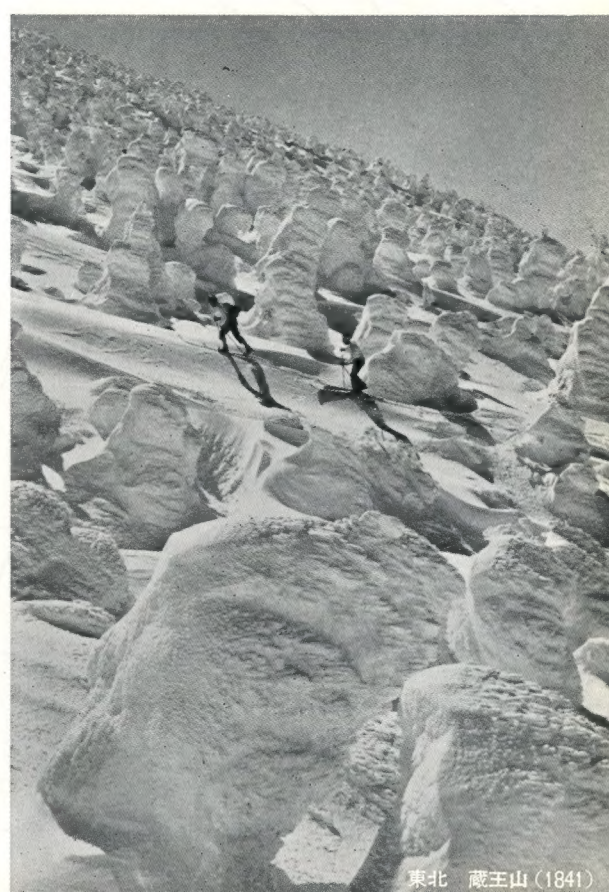
突風（富士山）

蒼氷（雲竜峡）

四国　石槌山（1981）

屋久島　宮之浦岳（1935）

## 積　雪

北の山，南の山，高い山と低い山で同じ雪が積っても様相がちがう、北海道の日本海岸にある利尻島では毎日大量の雪が降る．風の強い穂高の様な岩山では割に積雪は少い、一冬に数回の雪は四国の山をも美しいものとするが，屋久島の雪景色は更に珍しいものである．

奥穂高ジャンダルム

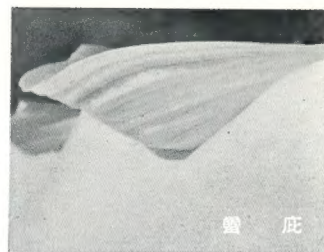
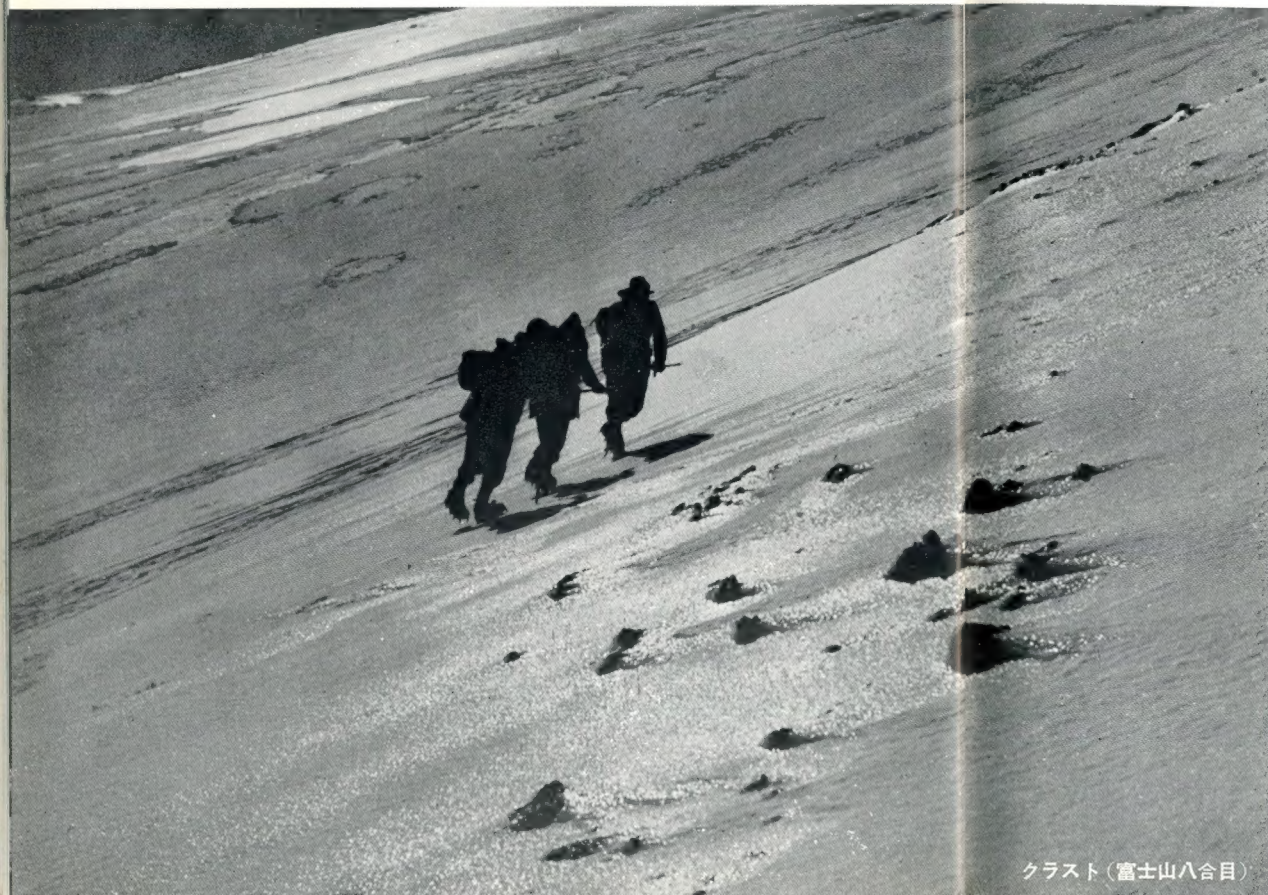
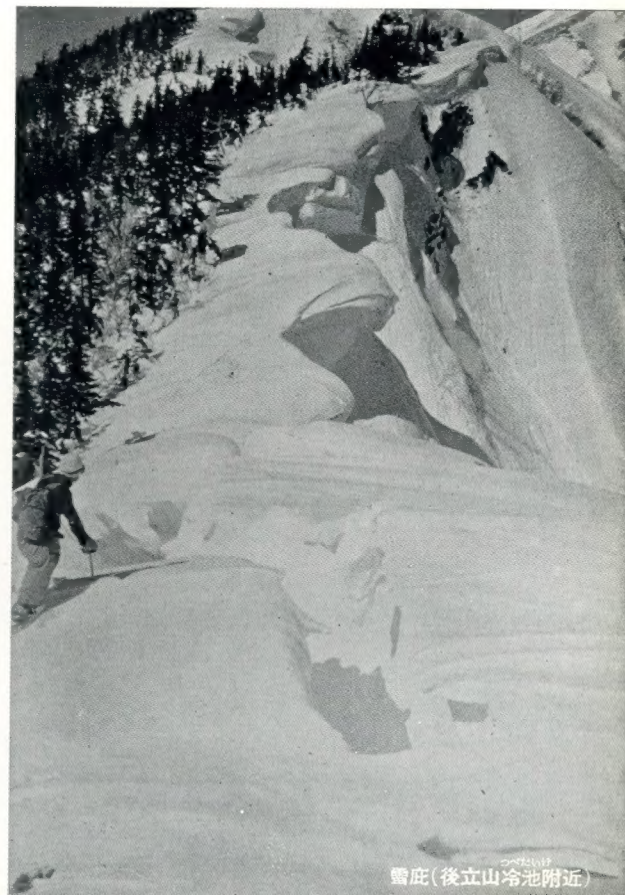
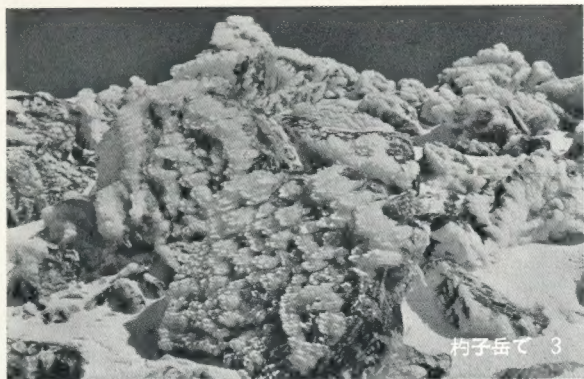
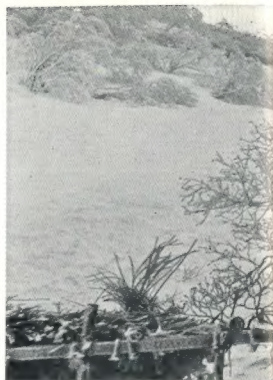
北海道　利尻山（1719）

東北　蔵王山（1841）

スカブラ（八方尾根）

サンクラストとスカブラ

## 雪庇とクラスト

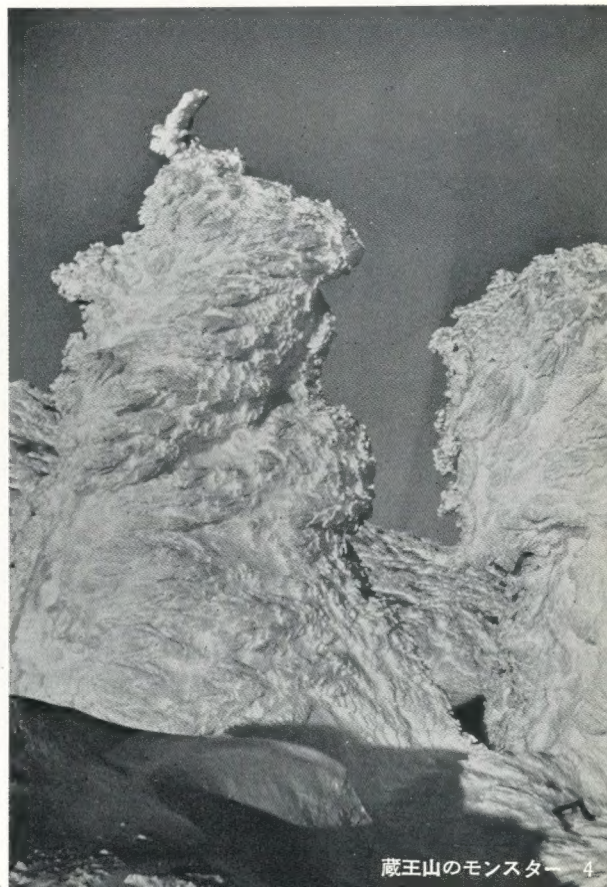
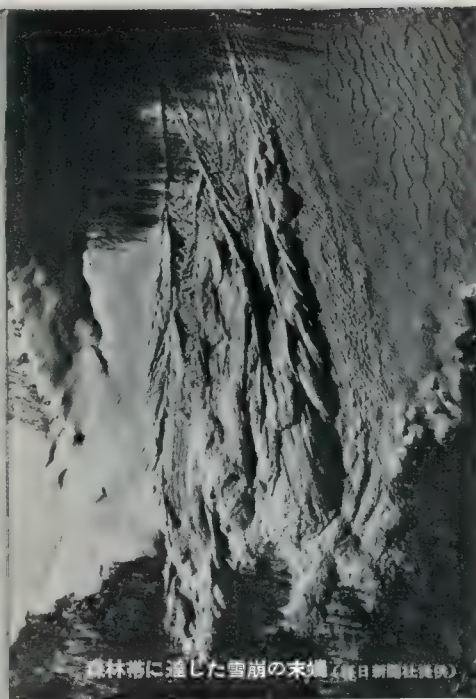
雪　庇

山の稜線では一冬中大体に於て同じ斜面から風が吹き上げて来るという場所が多い．そういう所では風の陰になる斜面に壁の様な雪がつもって雪庇になる．この上にはうっかりのれない．一度強い陽で溶けた雪面が凍ればサンクラストといわれる堅い氷の斜面となり風はウインドクラストやスカブラと呼ばれる波状の斜面を作る．ノールウェイ語が使われるのは同国に多い現象だからでもあろうか．

クラスト（富士山八合目）

雪庇（後立山冷池（つべたいいけ）附近）

杓子岳で　3

鳥海山　2

## 樹氷のいろいろ

横手山で　1

樹氷は美しく咲く冬の花である．造化の妙に驚くと共に登山者にとっては大きな魅力となる．ここにはその一部を集めて見たのだがこれだけでも何と種類の多いことであろう．けんらんたる氷のシャンデリヤ⑤や天ぷらのえびの尻尾③の様なのがあるかと思うと，まるで固まったばかりのアルミニューム鋳物の様なのもある④．②の様な寒々とした暗い樹氷風景も，忘れ難い想い出となるのである．

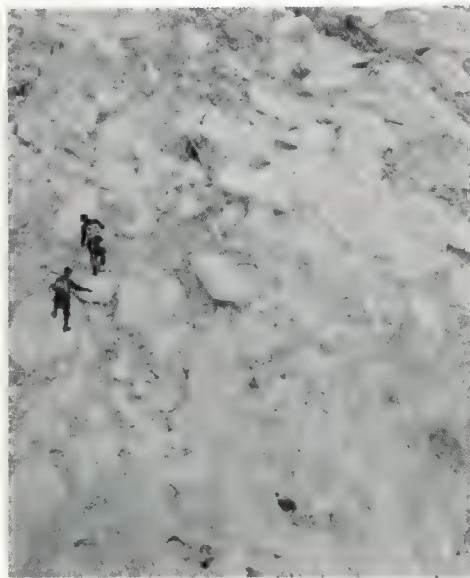
苗場山で　5

蔵王山のモンスター　4

森林帯に達した雪崩の末端（毎日新聞社提供）

A：雪崩発生（予想）地点　B：H大生発見地点　C：大沢側雪崩末端　⊗N・T・Kは日大・東大・慶大生遭難地点

# 雪崩

冬の山の美しさのかげには多くの危険が隠されている。絶えざる精進により危険はかなり回避され克服されるのであるが、しかし登山実力が上っても、又登山界の知恵が進んでも、なかなか跡を絶たないのは雪崩による事故である。毎冬相当数の有為の若い人々の生命が之によってうばわれるのは誠に残念である。

かなりの急斜面に雪が積ればどこでも雪崩は起ることが出来ると考えてよい。しかしそれで冬山に登ることを諦めるにはあまりにもその魅力は大きく、又登山者はあまりにも勇敢である。紙の上での分類法ではなく身についた生きた知識として典型的な雪崩の種類は正確に知って置き、実際に山に入ったなら雪崩の出そうな気配を敏感に予知出来る感覚を養わねばならない。大きく分類すると、粉雪が大量につもり積雪としてのバランスが破れて一度に崩落する新雪雪崩、風にたたかれて表面のかたくなった雪が何かのショックで内部の粉雪を潤滑剤として崩れる板状雪崩（これ等の雪崩は寒い真冬でも、深夜でさえも起きることがある）、大量に積った雪が日射、気温の上昇、降雨などにより比重を増して出る表層雪崩（比較的予知し易い）、春になって積雪の全層が地表から根こそぎ落ちる全層雪崩などが考えられる。

ここでは少い紙数で雪崩の種類を詳述出来ないので、最も近年の惨事であり犠牲者が多く、その規模も登山の歴史に類を見ない大きなものであった、昭和二十九年初冬の富士山の雪崩を中心として写真を集めて見た。

昭和29年初冬の富士山の大雪崩の様に新しい粉雪が大量に流れて起きた場合には，納まってから見るとそれ程の大雪崩があった様に思えないが①，掘りかえして見るとその厚みに驚くし③，雪崩の跡を全部歩くのに7時間もかかったという大きなものであった．こういう種類の雪崩では，発生直後の軟いうちだと10ミリ太さで2メートル長さ位の鋼の丸棒で作った雪崩棒をたくさん使い，一列に横に並んでさして行くと遭難者を探し出せることがある②．山岳部や会でこの棒を常備して置く必要がある．地こすり④や春の底雪崩⑤は，自然の偉力を物語っているが，出る所がきまっているから被害は少い．

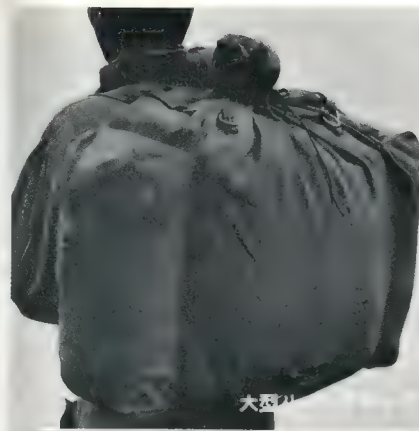
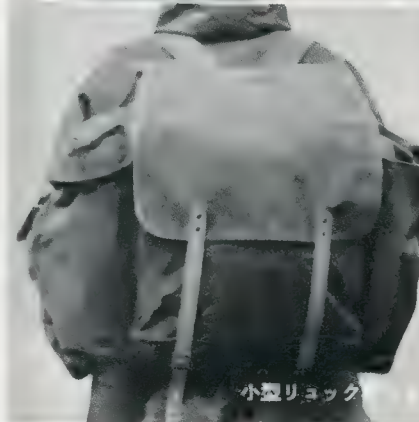
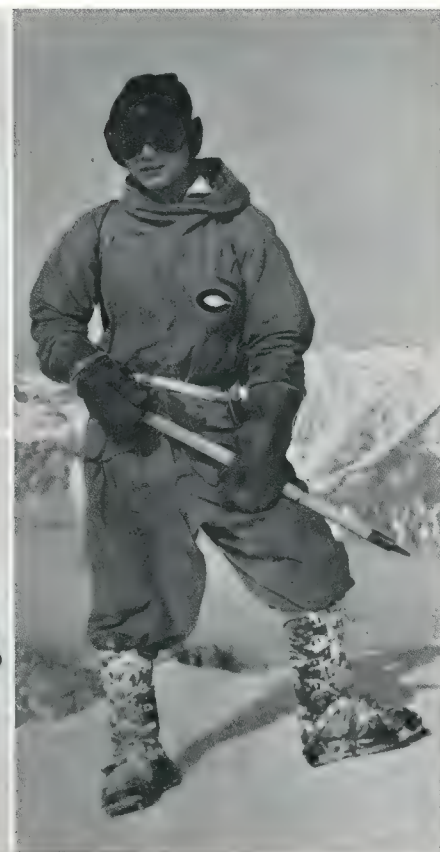
## 冬山へ登る仕度

リュックサックが戦時中戦後の生活に欠くことの出来ない道具であったことは記憶に新しい。羽毛の寝袋やウインドヤッケやコッヘルなども色々なことに役に立つ。これは山登りの道具が、人間がぎりぎりの最低生活をする為に非常に合理的に出来ている証ともいえよう。

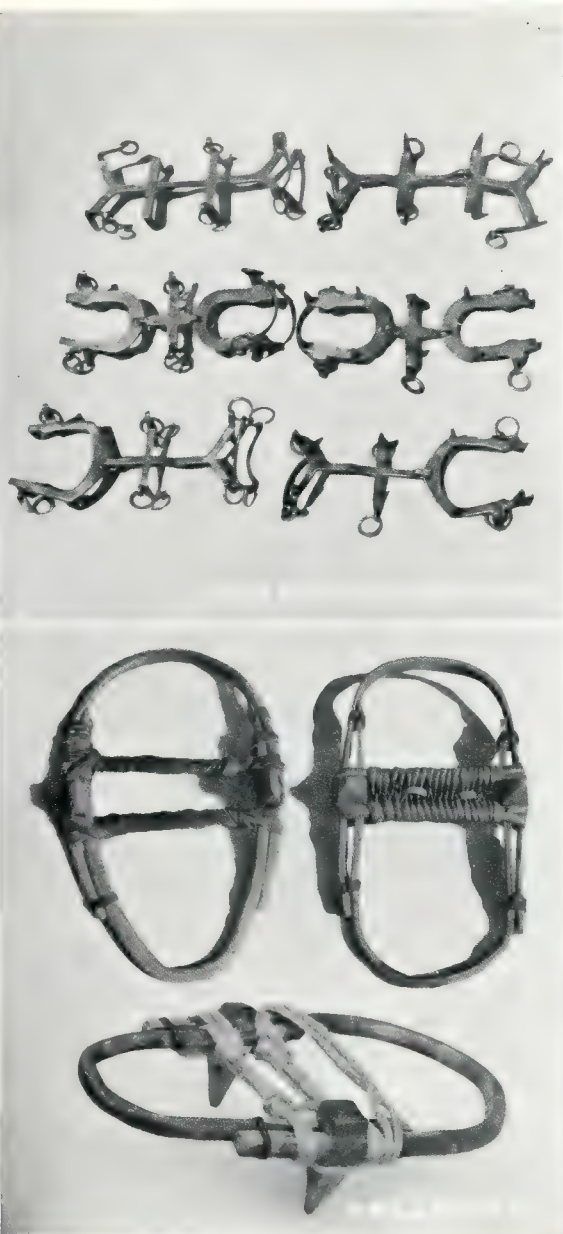
近年は軽合金やナイロン等の化学製品の進歩を取り入れて登山の道具も飛躍的改良がなされた。このことは他の技術の進歩と相まって幾多の輝かしい業績をあげることを助けた。しかし登山がスポーツである限り最後にたのむものは人間の身心の力であるということを常に忘れてならない。雪国の猟師は実に簡単な装備と食糧で雪の野山に起き伏しして獲物を追う。大切なのは形式化し流行しているものを買入れて無批判に用いることをせず、切実な要求に基いて選択し改良し身についたものとすることである。最近ナイロンザイルの切断事故が多い。ナイロン繊維の強さを過信し、外国で使っているからとかヒマラヤへ行った隊が使ったなどということだけをたのみにして、いきなり八ミリ太さのものに全体重をかけ生命を托するにはあまりにも日本のナイロン製造の歴史は浅く、登山界のこれに対する経験も少いのではあるまいか。色々なことのわかる迄は、たとえナイロンであってもやはり或る程度以上の太さのものを用いる慎重さがほしい。

装備全般については軽いこと丈夫なこと単純なこと、携行装備全体に互り質的にも量的にも釣り合いのとれていること、非常用の持ちものに万全の配慮をすることなどが必要である。

## 個 人 装 備

リュックサックは使う人の身体つきに応じ，又使用目的に応じて使いよいものを工夫する．登山靴の鋲は金属によるかゴムにするか好みに従ってよいがいずれにしても足入れがよく甲でよく締り，しかも爪先にゆとりのあるものでなければならない．スキー靴も滑降回転用のそれと区別せねばならない．ウインドヤッケやウインドパンツの生地は軽くて風を通さずしかも防水のきくものが望ましい．ナイロンと綿の混紡製品が非常によいが高価なのは欠点．ナイロンは防風と防水にやや難がある．帽子の工夫も大切である．尻に敷く毛皮は腰を冷さぬためによいものであるが，都会や車中でこれを下げるのは見よいものでない．その他ここにはのせなかったが上衣，ズボン，チョッキなどは上質の純毛製品でなければならない．特にチョッキはポケットの多いあたたかいものを工夫するとよい．手袋は皮(防風)と毛糸(保温)のものが必要である

登　高　用　具

スキーは材質や型は好みにまかせるとしても，重荷を背負って登り降りしても充分に使いこなせる様な身についたものであること．赤旗はやや黄色味のある赤が雪の中でもよく見える．要所にこれを立て（場合によっては数メートル離して２本立てる）帰り道の安全をはかる．シュタイグアイゼンの種類も色々あるが一番下に見られる型が最も普通である．締紐に工夫をこらして吹雪の中でも楽な姿勢で着脱出来る様にして置く．あらゆる装備に対して，常に予備ペンドのような非常の時に対する配慮を忘れてはならない．

17

## 登　攀　用　具

ピッケルは冬の山登りに欠くことの出来ない大切な道具であり，山男のスピリットの象徴でもある．力学も何も知らないスイスの山の鍛冶屋の手によって不恰好な斧から今日の洗練され合理化された形にまで発展して来た過程は面白い．ヨーロッパの一流といわれるピッケルはそれぞれ個性のある形をした立派なものである．日本のピッケルも本式に作られた一流のものは，材質にもニッケル・クローム・モリブデン鋼などを用いてあって極めて立派なものである．ザイルはそれを使っても登山が楽になったり，登れない所が登れるようになるといった効果は余りない．万一滑落しかけてもこれをくいとめて，悪場の通過を安全にする為に用いる．従来の上質麻にかわり近時はナイロンが用いられるようになった．軽くて丈夫なのが利点だが細すぎるものは危険であり，少くとも10ミリ太さ位のものが安全である．

山ノ内

門　田

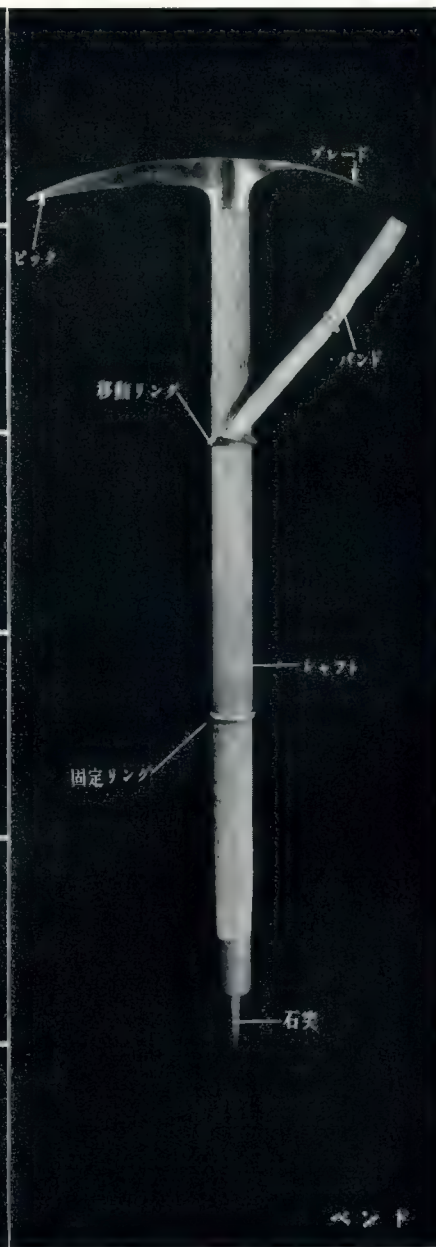
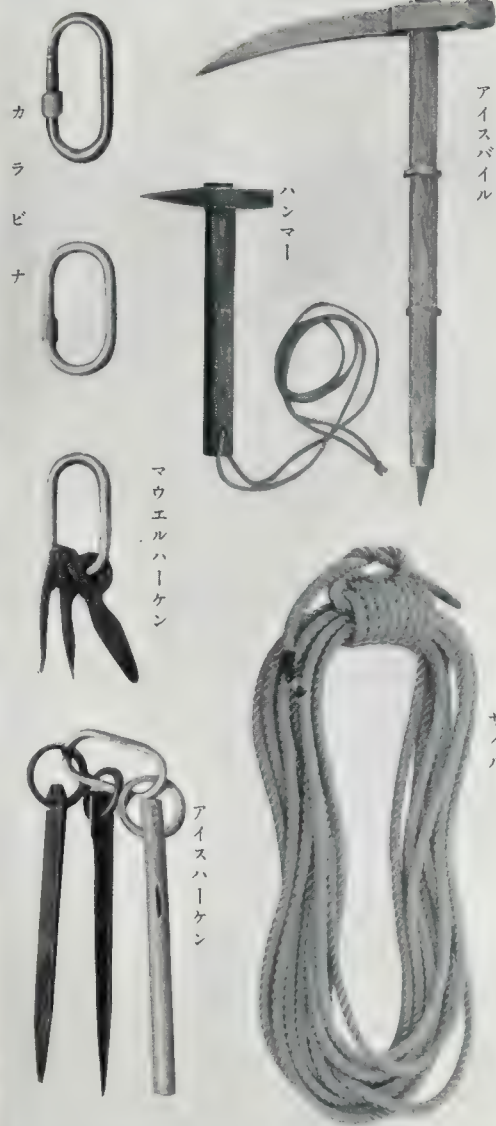
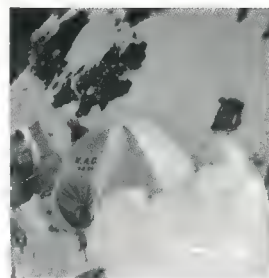
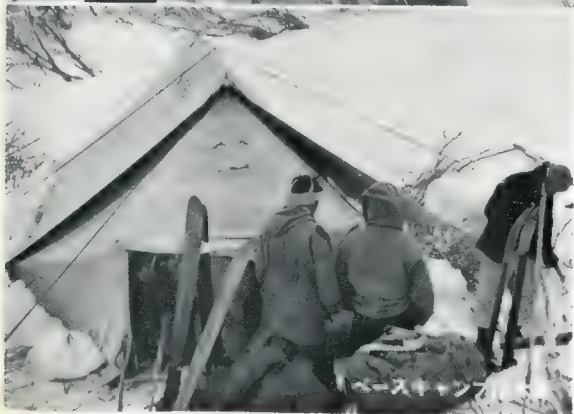
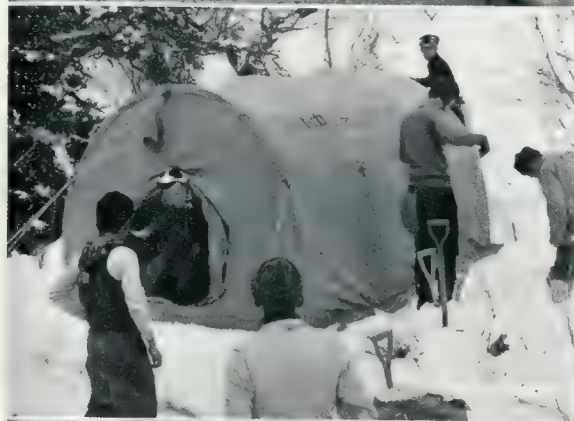
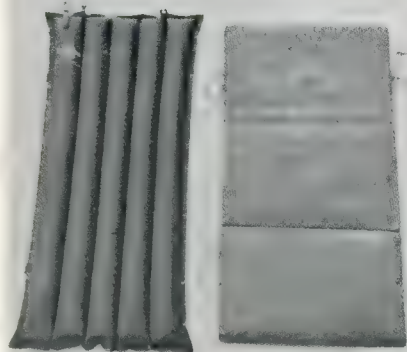
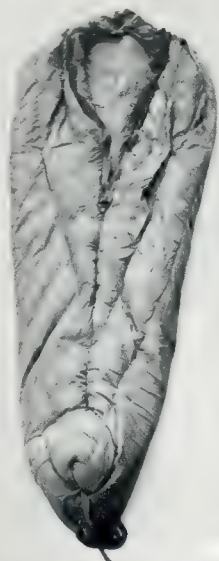
ハスラー

シェンク

シモン

ビョルンシュタット

ブレード
ピック
バンド
移動リング
シャフト
固定リング
石突

ベント

# 露　営　用　具

冬用の天幕は一般的に，風圧や雪の重みに耐える丈夫なものであること，軽いこと，居住性のよいことなどの条件を必要とする．細部に亙っては支柱の構造や張り綱，入口の構造，換気，保温，防水，色等に充分の配慮がいる．また用いられる場所や条件により色々の大きさと型がある．ベースキャンプ用の屋根型の大天幕は大きくて居住性もよいが風には弱い．カマボコ型は居住性が最もよいが風に対しては密着して作る雪の防風壁に頼らねばならない．ドーム型は耐風性は大きいが重いのが欠点である．ウインパー型は手軽に運べて設営も易しく最も広く用いられる．鋸は木を切る以外に雪や氷を切るのにも役立つから大きなしっかりしたものを用いる．雪を掘るショベルも大きなものでなければ役に立たない．炊事の熱源は故障が少く確実に使えて能率のよいものを使用する．

## 冬山の技術

山男の長年の願いはついに世界の高みの極エベレスト頂上に立つことを成功させた。日本の冬山に於ても多くの充実した業績がなしとげられている。これは登山技術の勝利ともいえるが、しかしよく調べて見ると、神秘的技術とか不可能を可能とする様な奇想天外な特別な技術などは一つもないのである。苛酷な条件の下で出来るだけ疲労を少くして暮しながら次第に目的の頂上に歩みを進め、更に安全確実に帰着する迄の生活全体が登山技術なのである。細かくいえば

一、寒さや風や高さや悪天候に耐えること
一、重荷を背負えること
一、雪の中で寝泊りし生活出来ること
一、役に立つスキー術が出来る
一、氷の急斜面、岩場、その他の悪場を確実に歩けること
一、天候や地形の判断を正確にし能率のよい行動をする
一、危険に対し常に明敏な判断を下し、的確な処置をとる
一、最良のメンバーシップを保ち合う
一、衛生管理をよくして常に身体をよい調子に保つ
一、全行動を記録に止めて反省の資とする

などの全てである。この様に書き並べて見ても容易なものでないことがわかる。これが他のスポーツに比較して登山特に冬の登山に熟達する為にかなり長い年期を必要とする理由でもあり、同時に登山をして之に一生涯を打ち込んでも悔いのないものとしている原因でもあろう。肉体的力に裏付けされた精神的、人間的な成長は冬の登山技術の上達に欠くことの出来ないものであろう。

競技用のスキー術が立派に進歩して行けば行くほど山登りの為のスキー術もしっかり確立して置かなければならない，重荷を背負い深い湿雪から氷斜面迄のあらゆる条件に応じて役に立つものでなければならない．十勝岳の下半身没する程の深い雪の中で巧みに廻転している写真は，その意味で面白いと思ってのせてみた．

### 輪樏（わかん）の用い方

スキーを使えない様な雪の深い急斜面をまっすぐに登り降りするときや，やぶの密生した斜面を登るときに用いられる．又スキーを折ったときのはきものとしても欠くことが出来ない．しかしあまり歩きよいものではない．地方により色々な型があるが，いずれにしても真中の乗緒の上に靴をしっかり取りつける．そして後足を外側にまわし気味にけり出して，ガニ股で歩く①．斜面を斜めに登るよりは真直ぐ登った方が工合よい②．硬雪斜面がまじるときはアイゼンと併用出来る．

シュタイグ
アイゼンをはいて

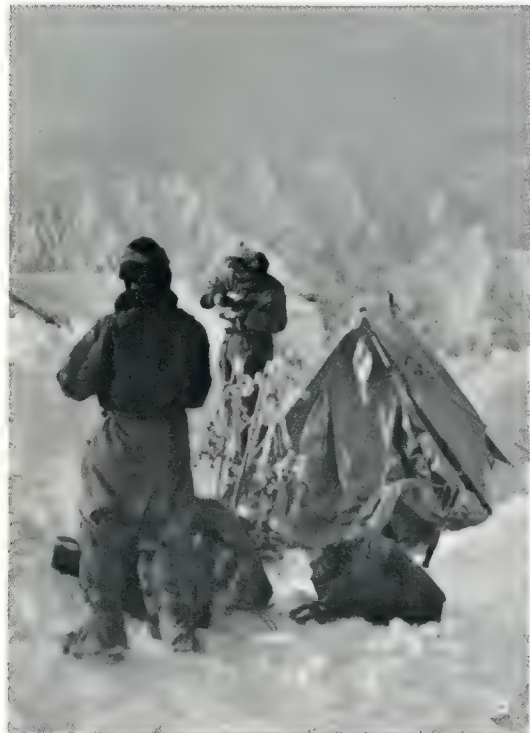
高い山の硬雪の斜面を歩くにはアイゼンをつけることが基本となる③．この技術をしっかり身につけ身軽に歩ける様にならなければならない．全部の刃が平均に体重を分担出来る様に靴底を斜面に対し常にフラットに置いて行く．焦らずにしっかり歩く①．滑落などということは一生に一度もない様に，しかも万が一滑り落ちたなら正しい技術で的確に止める②．④⑤雪庇きり．

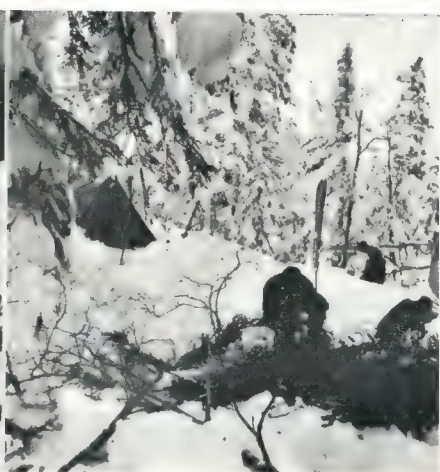
## ザイルの用い方

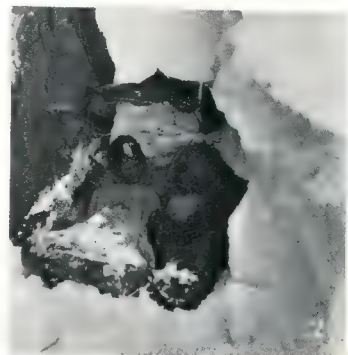
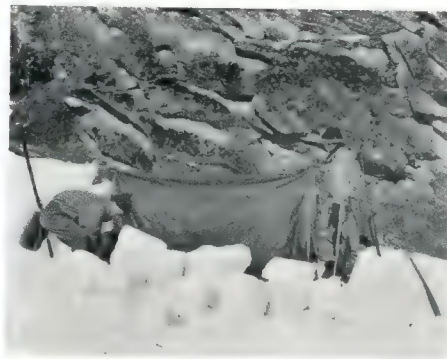
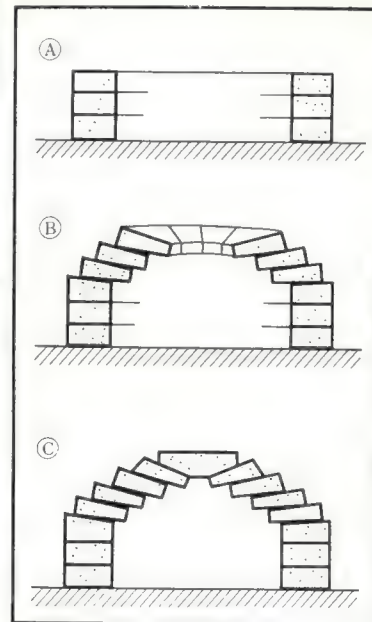
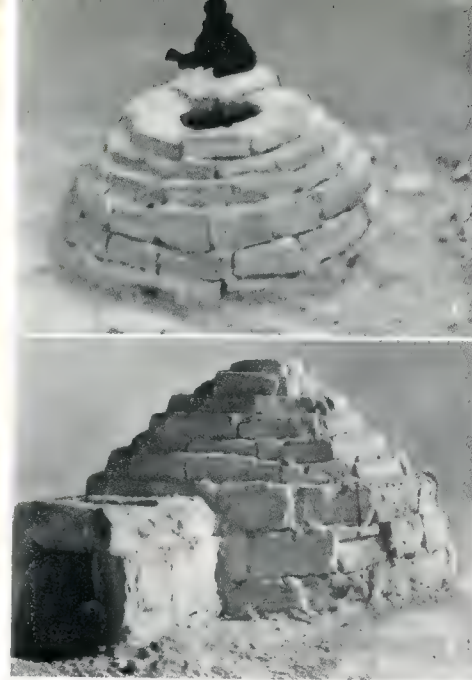
山の仲間がお互い信頼し生命、を託し合う最も具体的現われはザイルであろう．上手に用いられたザイルは悪場での行動をどれ程心強いものとするであろう．上手にとは的確にしかも用いていないのとあまり変りない位行動を妨げず迅速に使えることである①②．確保も見せかけや申し訳だけでなく，相手が滑落しても確実に止め得るがっちりしたものでなければならない③④⑤．

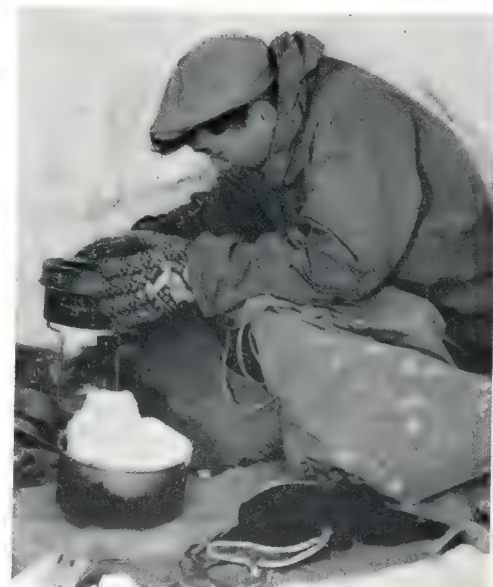
## 雪中露営

外には猛烈な暴風雪が吹き荒れている。やせ尾根に張った小さな天幕の中で、もう何日もうとうとしたりわずかの物を食べただけでくらしている。こうして再び晴れる日を待ってささやかにしかも脈々と燃えつづける生命の灯をみつめていると、人間の生活力の強さをつくづくと考えさせられる。雪中露営特に森林限界より上の高所露営技術の進歩は、冬の登山行動の世界を広めもし、高い所迄おし上げもしたのである。まず森林の中に天幕を張るときは樹木を活用して防風、積雪対策を充分にたてる。焚火場も滞在日数に応じてしっかりしたものとする。高所露営にあっても基本的にはやはり天幕を用いる。設営に要する時間が少いし、場所の制約も少いからである。この場合入口の向きのきめ方や、防風、積雪の対策などはなかなか難しい。形式的に半端に作った防風壁はむしろ雪に埋ることを助長し害になることがある。雪洞やイグルー(エスキモー式雪小舎)もそれぞれの得失を知って用いれば役に立つ。ヒマラヤに於ても活用されている。マナスルの下ナイケコルに作ったイグルーは日中の氷河の暑熱をさける為にも、風を知らずに安眠する為にも役に立ったときく。いずれも風に対しては強いが、雪洞は場所の制約を受けるし天井の沈下、入口の埋没等の欠点がある。イグルーはどこにでも作れるが雪質の制約を受ける。又製作に若干の熟練が要る。又両者ともに設営に或る程度の時間(標準で約二時間)が要り、その間に手袋のぬれることも欠点といえよう。

露営法がきまったなら、炊事採暖法、ぬれ物のほし方、食糧の配分使用法その他生活を快適にするためになさねばならぬことが多い。

## 幕営

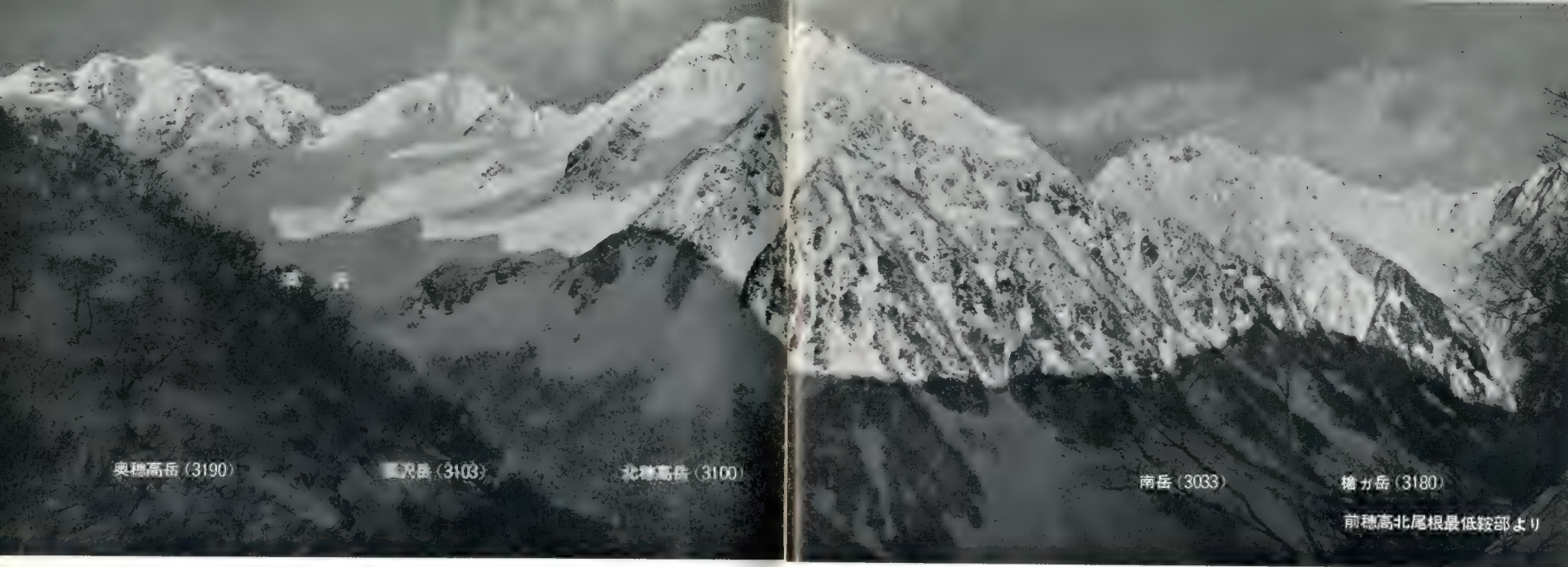
荒涼たる冬の大自然の中にあって，ささやかな天幕こそは登山者にとって何よりも心強い憩いの場所である⑤．そこには食糧も暖房も灯火も，そして寝具も一切が小じんまりと整頓されてある．心残りない一日の活動を終え⑥，たのしい食事をすませたあと①は外を吹き荒れる嵐ものかは深いねむりにつくのである②．尚森林帯のキャンプでは滞在日数に応じて雪の中に太い丸太を幾重にもしきならべて土台としその上で焚火する③④

雪　中　露　営

天幕を使わない露営には岩かげを利用する方法②やツェルトザックを使う③事もあるが，居住性のよい点では雪洞がよい①．これにはあらかじめ地形を充分に偵察しておく必要がある④．洞内の湿気を低くするためには温度を余り上げないこと，又入口を吹雪等に埋められない様に工夫する⑤．

## イグルー（エスキモー式雪小舎）

エスキモーは獣骨で作った粗末な鋸を用いてわずかの時間で16人用などという大きなのを作るという．昭和14年頃イタリーの登山家マライニー氏が北大に伝えたこの技術も，広く実用に使われる様になったのは近年である．働き手を雪塊切り出し，運搬，構築の三役に分ける．大切なのは整然と丁寧に作ることである．土台を踏み堅めてから最初の数段は真直ぐ上に積んで行く①．次にはやや薄手幅広の雪塊を思い切って内側に追い込んで積む③④．最後にのせる大きな塊を構築係は中に残って上手にささえる．この時踏み台用の雪塊を外に別に積むとよい．それから崩れない場所を選んで入口を切り抜き，雪をかけてすき間をふさいで完成⑧．

## 山の危険と遭難

山に登る者は常に危険に直面している。冬の山に登る者にとっては尚更のことである。ひどい寒さ、はげしい風、雪崩、等におびやかされながら生活し行動して目的の頂上に立とうとすれば、その間に色々な困難と危険に遭う。しかし登山の目的を達成する為にも、自らの身体と生命を大切にするためにも、又家族に心配をかけたり、社会に迷惑かけたりしない為にも絶対に遭難はさけなければならない。各メンバーが立派な登山者であり、隊としてのまとまりがよく、準備と隊の運行が充分に立派に進められて行けば大抵の危険は回避出来る。これは登山の下手な人々は高尾山でも遭難するが、立派な人々の力を結集すればエベレスト登頂にも成功出来ることを考えればわかる。どんなささやかなこともゆるがせにせず、一生の間遭難又はそれに類似のことを仕でかさない心構えに基いて行動することを繰り返して強調したい。しかしどの様に注意を払い慎重に行動しても大自然と人間との闘いであって見れば、そこに何か事が起ることが稀にあるのは止むを得ない。このとき立派に振舞い最善の処置を最短の期間にとり得ることも大切な登山の技術といえよう。悪い事態に直面したときにその人の真価がわかるということは登山に於ても例外ではない。登山本部(ちょっとした登山をするのにも隊としての連絡先をきめて置くことを励行して頂きたい)に対して打つ電報一つでさえ満足に綴れない登山者の如何に多いことであろう。いつどこで、誰がどういう種類の遭難をしたのか、そして生きているのか死んだのか、他隊員の安否はどうか、又救援隊が要るのかどうか、等ということを要領よく打電しなければならないのである。

遭難対策をもう少しつっこんで考えると、まず第一に平素から山の危険の各種類についての知識を加える努力をせねばならない。それも単なる知識としてではなく身についた生きた技術としてである。その意味では真面目な登山の修練そのものが危険対策である。若い高校山岳部員が部にも学校にも届けないで穂高に入り遭難死した例があるがこんなことは以てのほかである。何も堅苦しい組織である必要はないからどこでもきめた所(出来得ればしっかりした先輩などにお願いする)にコース、日程、隊員の氏名任所など計画の全体をわかり易く紙に書いて残して行くのである。隊からは登山の無事終了したときは勿論のこと、山の中からでも便りが出来れば隊の様子を知らせることが望ましい。

次にいよいよ事が起きてしまった場合、そのパーティーの取る可き処置が正しく行われることは最も大切である。動揺を来し、まず外部からの救援を求めて支離滅裂になってしまうのはまずい。あわてないでその隊自体でとるべき最善の処置のことを考える。その為にはリーダー又はサブリーダーなどの隊のかなめ役が落着いて隊員の信頼を集め、その統制下で迅速果敢な救助作業をとるのである。もし隊内に事故者を出した場合にはその人々の救出と応急手当に最善をつくす。墜落などで事故者を一時見失なっても、発見出来る迄は生きているものと考えて迅速な行動をとること。これ等と平行してとるべき大切な処置は、他隊員の安全とそれ以上の事故が起きないための手段である。応急処置が一通り済んでから自隊のみでは完全な始末が出来ないと思ったなら、大至急しかも的確に登山本部へ救援隊の派遣を要請する。登山本部は時を移さず救援隊を出して活動を開始するのであるが、その場合やたらに感傷的になって好意はあるが登山実力のない人が現場附近に多く立ち入ることは、かえって救援作業をさまたげる。きびきびと能率のよい処置により少い経費で多くの効果を挙げるのである。尚事故者の搬出法②③や、病気、負傷の手当法①なども平素から知って置く。局部凍傷や全身凍傷の最善の手当が、三八度位の湯にいきなりつけることと知らないで、いまだに雪でこすったり毛布でこするなどという方法しかとれない人の多いのは残念である。④は三十年一月穂高で遭難した岩稜会S君の凍傷した足である。後に第三指迄切断された。

奥穂高岳(3190)　涸沢岳(3103)　北穂高岳(3100)　南岳(3033)　槍ヵ岳(3180)

前穂高北尾根最低鞍部より

## 登山隊の編成と運行法

（特に極地法について）

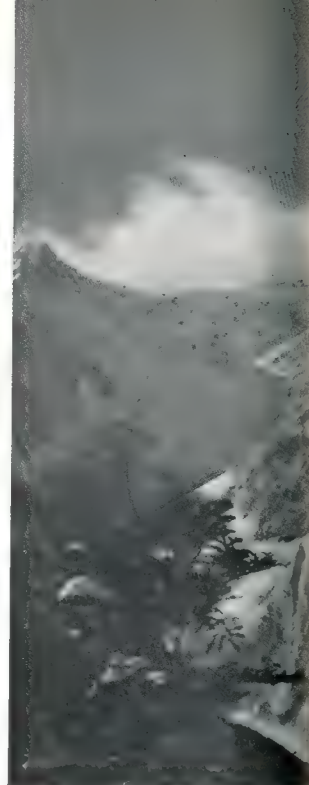
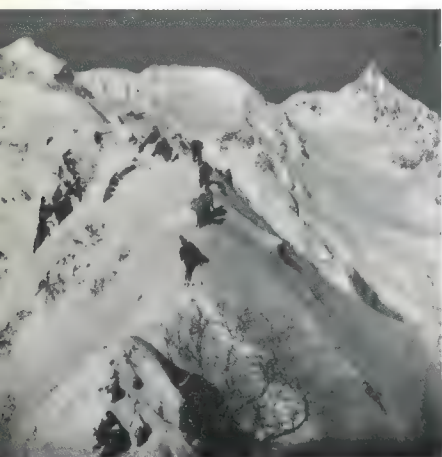
登山隊のメンバーの編成と隊の運行法は幾通りか考えられる。たのしく全員で頂上に立つことの出来る山登りと、非常に困難で登頂出来るかどうかもわからない山登りとでは、その隊の編成に運行にかなりの差が見られるのは当然である。

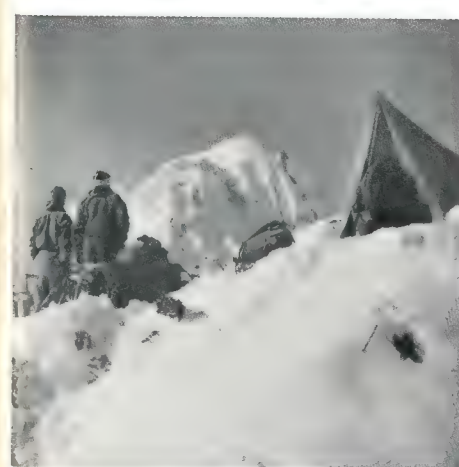
難しい冬の山登りやヒマラヤの登山に於ては、極地法と呼ばれる登山法が採用されることが多いのでここに紹介する。普通は十数名のメンバーが三—四名を以て編成される数隊に分れ、ベースキャンプから頂上迄の間に必要に応じて数ヵ所のキャンプを設け、次第に登頂の態勢を整えて行く。背後の守りを厚くして悪天候にわざわいされることを少くし、出来るだけ安全確実に頂上に立つことが出来るというのがこの方法の特長である。頂上には普通二—三名が選ばれて立つ。その数名の登頂を以て隊全体の成功とするものであり、他の人々も犠牲とか縁の下の力持ちなどという窮屈な考え方をもたず、各人とも課せられた任務にベストを尽し、これによって全体を成功せしむることに喜びを見出すのである。しかし一方であまりに形式化した運行法にしばられその中できめられた働きをしていると、メンバーが盲目的に無反省に行動する傾向も出て来るから、この点には充分注意し、一人一人が立派な登山者として生長して行くことが望ましい。



**いくつかの学校山岳部では長年にわたって極地法的登山法の研究をすすめ，多くの立派な登山記録を作った．ここに掲げた(54～59頁)写真は中央大学山岳部が昭和27年11月20日から年末迄の40日間を費して穂高の横尾尾根を登り，途中に五つの高所露営を設け，南岳，北穂高岳を越え奥穂高岳に達した折の記録である．比較的天候に恵まれたが(約10日快晴の日がある)悪天候の日でも殆んど休みなく前進の活動をつづけ，頂上に達することができたのはこの方法の強みといえよう．**

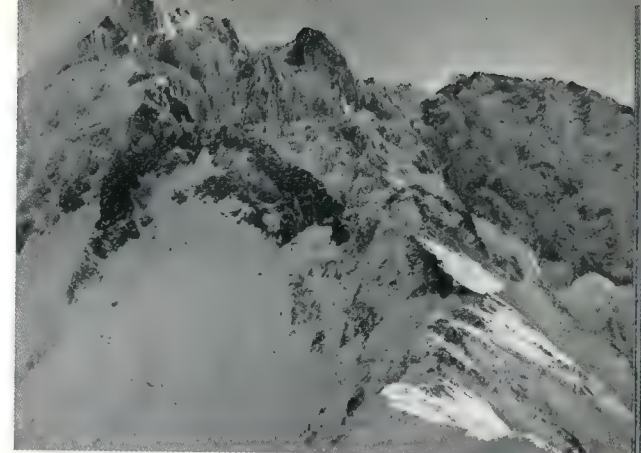
C.3 設営

隊員は隊長斎藤武重君ほか18名であり，5隊に別れて行動している．食糧は，主食には米，餅，乾パンを用いその計130貫，副食物の重量は65貫，総計195貫目となった．便宜上A食よりV食まで22種の基本献立があり，AよりJまでが米中心，KよりR迄が餅中心，SよりV迄が乾パン中心となっている．そのほかに各隊員は必ず2日分の非常食を持っている．装備としては天幕6張その他の露営用具が約42貫，ストーブからタワシに到る一般生活用具が67貫(ガソリン15貫，炭8貫の燃料を含む)ザイルその他の登攀用具が26貫などである．

横尾尾根より北穂高を望む

横尾の歯の登り　右手に槍ヶ岳

C.2　前方は北穂高





C.1 （第一キャンプ）

二のガリーの登り

南岳より北穂高を望む

以上のほかに，各隊員の個人装備が相当の重量になり，携行品の全重量は350貫をこえている．これ等のものを用いて整然と隊を運行してゆかねばならないのである．出発以来苦闘の一ヵ月を経た12月19日，北穂高頂上のC.5(第5キャンプ)に待機した3名の隊員は，4時に起床し6時に出発，次第に悪化した天候は氷片を吹き上げる強風となったが，9時半ついに目指す奥穂高の頂上に立つことが出来たのである．かくして幾多反省すべき点はあるとしても，安全確実に目的達成という所期の成果をあげて全員元気に山を下ることが出来た．

奥穂高頂上よりジャンダルム

C.5　北穂高頂上

C.4　前方北穂高



下山　横尾谷出合

奥穂高登頂

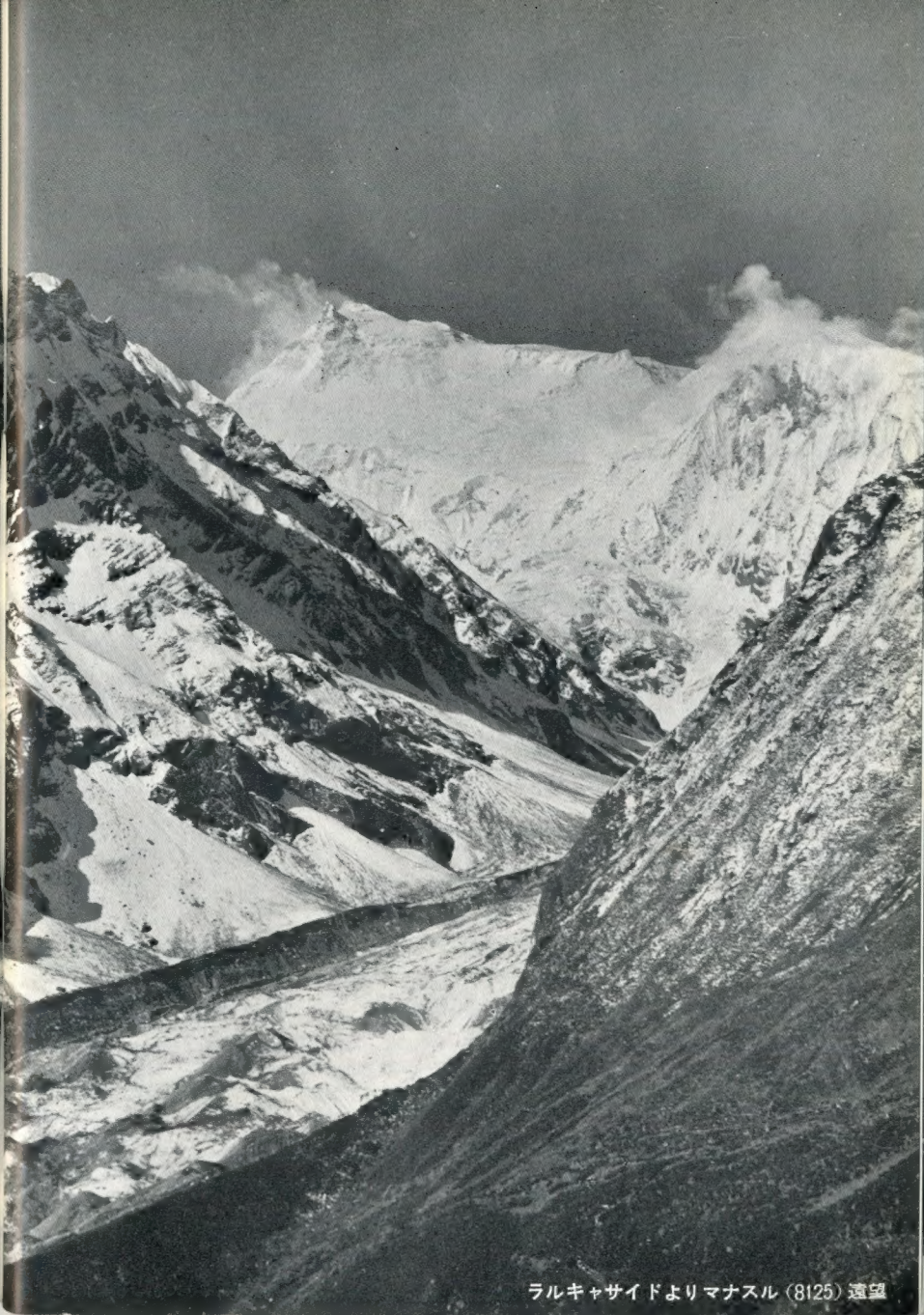
ガネッシュヒマール (7406)

ポカラ(ネパール)よりアンナプルナ連峰マチャプチャリを望む

## ヒマラヤの山々

灼熱の印度平原と荒涼たる西蔵高原の間の空を断ち切って、東西に長くヒマラヤ山脈が連なっている。八千米級の頂上が十数座、七千米六千米級に至っては数知れぬ程多くの山々が千古の氷河を走らせ雪煙を上げて立ち並ぶ有様は、世の人々の眼には親しみ難い恐しい風景であっても、山登りをする者にとっては夢の風景であり最後の願望でもあり聖地でもある。之等の頂上を訪れる為に、一九世紀の終り頃から優れた登山者が粘り強い努力を続けて来た。特に最高峰のエベレスト(八八四〇米)に対しては一九二一年以来主としてイギリスの登山者により幾多の試みがなされた。一九二四年にはノートンが実に八五三四米の高さに達したあとを受けて、頂上へと出発したマロリー、アーヴィンの名登山者は遂に帰来出来ないという悲劇が起きた。その後今年こそは成功という希望にかられながら三〇年の歳月が流れて一九五三年、ハントをリーダーとし、装備にメンバーにかつて無い用意をしたイギリス隊は遂にその高みの極みを訪れることに成功したのである。これに前後して各国の隊がヒマラヤを訪れて次々と未登の頂にかかる神秘のヴェールをはいで行った。

日本の登山者もヒマラヤを訪れたいと願う強い憧れを持つことに於てはいずれの国にも劣らない。そして第二次大戦に敗れ去ったあとの一九五二年秋以来アンナプルナ連峰や、マナスル峰(八一二五米)等に日本登山隊の着実な成果が見られる様になった。隊員として活躍した若い人々の大部分が、日本国内の冬の山で地味にじっくりと精進し修練して来た人々であったことは、今後への大きな希望となったのである。

(写真は毎日新聞社提供)

ラルキャサイドよりマナスル（8125）遠望

## 登山用装備表（日本山岳会「山日記」による）

| 一般用具 | | スキー露営用具 | 予備品その他 |
|---|---|---|---|
| 上衣 | 三ツ道具 | スキー | 電池・豆電球 |
| ズボン | アイスハーケン | ストック | 靴紐 |
| カッターシャツ | 補助ザイル | ビンディング | アイゼンバンド |
| チョッキ | 雪崩紐 | シール | 絶縁テープ |
| セーター | | ワックス | 針・糸 |
| | ルックサック | ワックス落し | ドライバー |
| シャツ | 小袋・行李 | スキー靴 | きり |
| ズボン下 | ふろしき | アングルバンド | 針金・釘 |
| パンツ | 細引 | 防寒帽 | 安全ピン |
| 手袋 | | | 荷札 |
| 靴下 | 地図 | テント | 革油 |
| | 磁石 | ツェルトザック | スキー修理具 |
| 帽子 | 時計 | シート | 予備ワイヤー |
| 耳覆い | 電灯 | マット | 新聞紙 |
| マフラー | サングラス | 寝袋 | |
| ゲートル | | ろうそく | 救急薬 |
| | マッチ・ライター | アセチレン灯 | ガーゼ |
| ウインドヤッケ | 水筒・テルモス | かいろ | 三角巾繃帯 |
| ウインドズボン | ナイフ | スコップ | 常備薬 |
| 雨具 | 罐切り | | 殺虫剤 |
| ビニールシート | 手拭・紙 | 飯盒・弁当箱 | カメラ・附属品 |
| | 洗面具 | コッヘル | スケッチ・ブック |
| 山靴 | | 鍋・釜・やかん | 望遠鏡 |
| 地下足袋 | 鉛筆・万年筆 | 食器類 | 寒暖計 |
| わらじ | 手帳 | しゃもじ | バロメーター |
| クレッターシュー | 山日記 | 茶こし | 風速計 |
| オーヴァーシュー | はがき・切手 | ふきん | |
| | 列車時刻表 | 庖丁 | 食料 |
| ピッケル | 身分証明書 | バーナー | 嗜好品 |
| アイゼン | 割引証 | 燃料 | 非常食料 |
| わかん | 印鑑 | うちわ | 予備食料 |
| ザイル | 財布 | 鉈・鋸 | |

この表の中から，その登山の規模により，シーズンによって携行品を決定する．

春——神城村より天狗岳

横尾尾根天狗池附近より前穂高岳

冬の登山 66

¥ 100